

自らの教育の下手さ加減を棚上げして、身勝手な考え、学部演習や卒論演習などで、歳も近く学生が抱える問題を理解できる院生が本来の意味でのTAとして学生を指導するならば活性化につながるのにと
いう考えが、ふと頭をよぎった。

最後に、司会者のテキパキとした進行が、会を盛り上げた。七月四日の二回目には、司会者の機転によってだとおもうが、最後の一五分を使って、聴講者からの質問に発表者が答える時間があつた。これもよかった。

〈第二回〉

百年前の「自分」に問いかける

伊東 久智

私は今から百年ほど前の日本の若者たちについて研究をしています。学部時代は所謂文学青年をもって自任し、講義そっちのけとまではいかないまでも、頭の八割方

は文芸サークルでの活動やそこで得た友人たちとの交わりによって占められていました。ただ専攻（当時はコースや論系ではなく専修といいました）を選ばなければならぬ段になって、一つの決断を下しました。それは、入学前から恋人のように感じていた文芸専修ではなく、入学前にはマンシヨンの隣人のような存在であつた日本史学専修へと進むことでした。理由は三つ。一つは専門性への憧れとでもいうべきもので、各専修から講義を寄せ集める文芸専修ではなく、一つの学問分野を追求してみたという素朴な思いです。また、友人とは全く異なる方向へと進むことで、知識の欠如からため込んでいた劣等感を克服（逃避といつてもいいですが）したいとも考えていました。これが二つ目です。そして最後に、故・由井正臣先生の感化がありました。学部時代の私には大学の講義というものがあるにも学生に媚びた軽薄なもののように感じられたのですが（若気の至りとはこのことです）、先生の講義だけはいつ

も教室左前方・窓際の席に陣取り、せっせとノートを取っていた記憶があります。

そうして私は由井先生のもとで高校時代からささやかな関心を抱いていた五・一五事件について卒業論文を書くことに決めました。その関心というのは複合的なもので、一つは被害者である犬養毅という老政治家に対する関心であり、いま一つは加害者である若者、自分とほぼ年齢を同じくする若者たちへの関心、この二つの関心が不可分に入り混じっていました。

現場に駆け付けた女中さんの裁判証言によれば、被害者である犬養は、右こめかみに銃弾を食らった後もお、「あの若者を呼んで来い、能く話して聞かしてやる、又話を聞かう」といった内容の言葉を繰り返して吐き出したといひます。私はそれを読んだ時、この七六歳の老人の執念といひますか、そうまでして彼が若者に伝えたかったこととは一体何なのか、「知りたい」と強く感じました。そしてそう一つ問いを發するや、そもそも犬養という政治家の生涯と

は？ 犬養が最後までこだわり抜いたこの国の議会政治とは？ といったように、問いが連鎖してゆく面白味を初めて味わうこととなりました。

転じて加害者である若者についても、裁判での供述などを読んでみますと思わぬ発見が続きました。変電所襲撃のために上京した際、初めて「ソーダ水」を飲んだ感激を語る若者、同じく襲撃を控えながらも仲間とともに「銀ブラ」を楽しんでいた若者。そこに現れてきたのは、テロリストであることを除けば、私と何も変わらないごく普通の若者たちの日常でした。私は自分を投影しながら、彼らへの問いかけを続けました。どんな生活を送っていたのか？ テロ以外に政治と関わり合う方法はなかったのか？ ——？ ——？ やはり問いは無限に連鎖していくようでした。

こうして五・一五事件という卒論テーマが一つの始点となって、そこから当初思っても寄らなかつたより大きな関心が生まれましました。犬養への関心から生じた議会政治へ

の関心、若者への関心から生じた彼らと政治との関わり合いへの関心、この両者が結合して、若者の政治運動と議会政治との関係性という今まさに私が取り組んでいる新たなテーマが生まれたのです。もっともその間、語り尽くせぬ紆余曲折がありましたので、巡り巡って学部時代の関心へと舞い戻ってきた、といったほうがより正確かもしれませんが。

今思えば、学部時代の私は理由のない不安感や言葉にできない閉塞感の「根っこ」を掘みたくて、文学、やがて歴史学に救いを求めたのだと思います。そして私は幸いにも歴史の中に住むもう一人の「自分」に問いかけるといふ喜びを見出すことができました。そういえばどこまでも暗い人間のようなのですが（それを敢えて否定もしませんが）、一つ一つの問いかけが連結しながらより大きな問いを生み出していくダイナミズムといますか、視界が開けていく爽快感といますか、そうしたものは明るいみなさんにも是非とも味わっていただきたい

と思います。

私は最近、研究対象がどんな年下になつていくということもあつて、つまりは私が年をとつたということもあつて、歴史の中に「自分」以外のファクター、すなわち「人間」や「社会」を見出す喜びにも目覚めてきたところです。そうしてみると、私は今頃になつてようやく独善的ではない〈真の歴史学〉の領域に足を踏み入れようとしているのかもしれません。ですが、私はそれでよかったのだと確信していますし、みなさんにも若い時くらいは思う存分独りよがりな研究、自分をさらけ出す赤裸々な研究をしてもらいたいと願っています。

政治の季節と「他者」の歴史

吉野 正史

「すべての歴史は現代史である。」歴史学に限らず、すべからず学問というものの出